



2009年1月8日

「学生による授業評価アンケート」およびFD(Faculty Development)に関する調査
(2008年3月実施)集計結果報告

FD推進センター

「学生による授業評価アンケート」およびFD(Faculty Development)に関する調査にご協力いただき、ありがとうございました。

1. 調査の概要

今回、専任・兼任教員の先生方2,423名に調査書を送付し、709通の回答を得た。回答率は29.3%で、2005年度に行ったときの35.3%より低下した(なお、2005年度の調査では、兼任教員の在籍者数について学部間における重複があったので、実際の回答率は4割近かった)。また、2005年度において、回答者に占める専任教員と兼任教員の割合は23.5%対74.9%(1.7%は無回答)であったが、今回は16.6%対81.5%(1.8%は無回答)であった。専任教員にいわゆるアンケート疲れの現象がみられると考えられる。

表1 専任・兼任別回答者数、回答率など

区分	回答者数(人)	比率(%)	在籍者数(人)	回答率(%)
専任教員	118	16.6	631	18.7
兼任教員	578	81.5	1,792	32.3
無回答	13	1.8	-	-
計	709	100.0	2,423	29.3

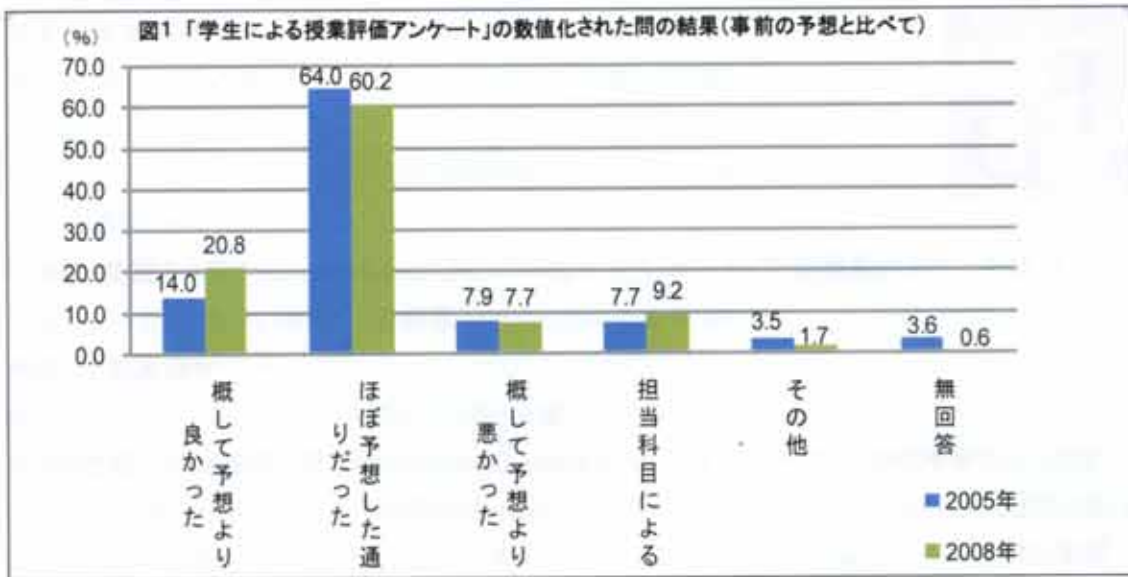
なお、本アンケートは、2008年3月下旬から4月上旬まで、2007年度、法政大学に在籍する専任、兼任教員全員を対象に、無記名、郵送方式(配付、回収とも)で行った。

以下、各問の集計結果と自由記述欄に記載されたことがらをまとめる。

2. 「学生による授業評価アンケート」の結果に対する見方

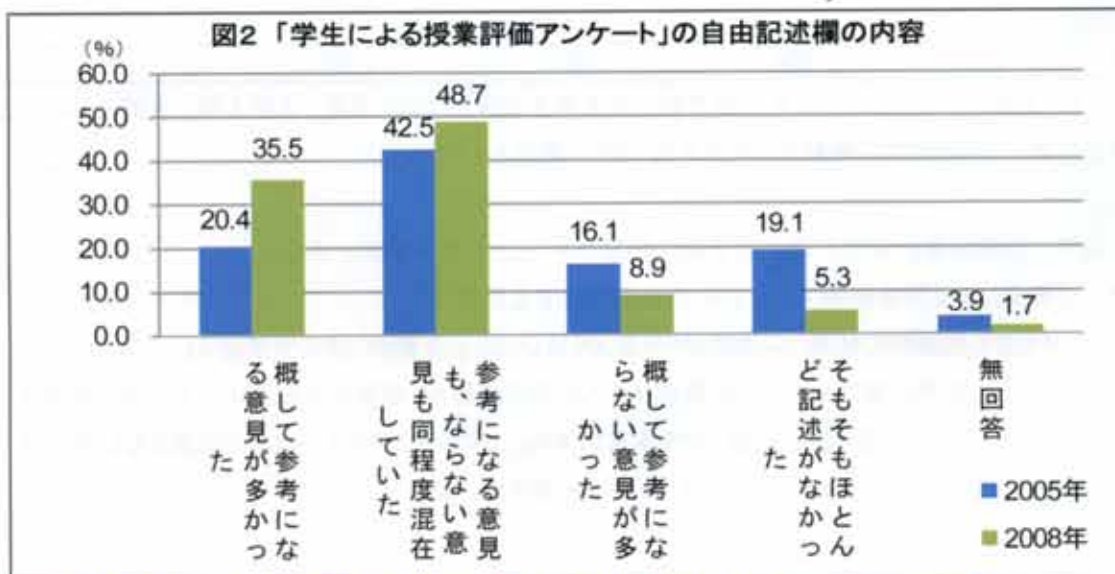
(1) 数値化された設問の結果 — 2割が「予想より良かった」、6割が「ほぼ予想通り」

■ 「学生による授業評価アンケート」の数値化された問の結果が、事前の予想と比べてどうだったかをみると、「ほぼ予想した通りだった」は2005年度の64%と2008年の60%とでは大きな差はないが、「予想より良かった」は、2008年が21%となり、7ポイント増えた。(図1)。



(2) 自由記述欄の内容 — 「参考になる意見が多かった」(36%)と「参考になる意見も、ならない意見も混在」(49%)の両者を合わせて 85%。

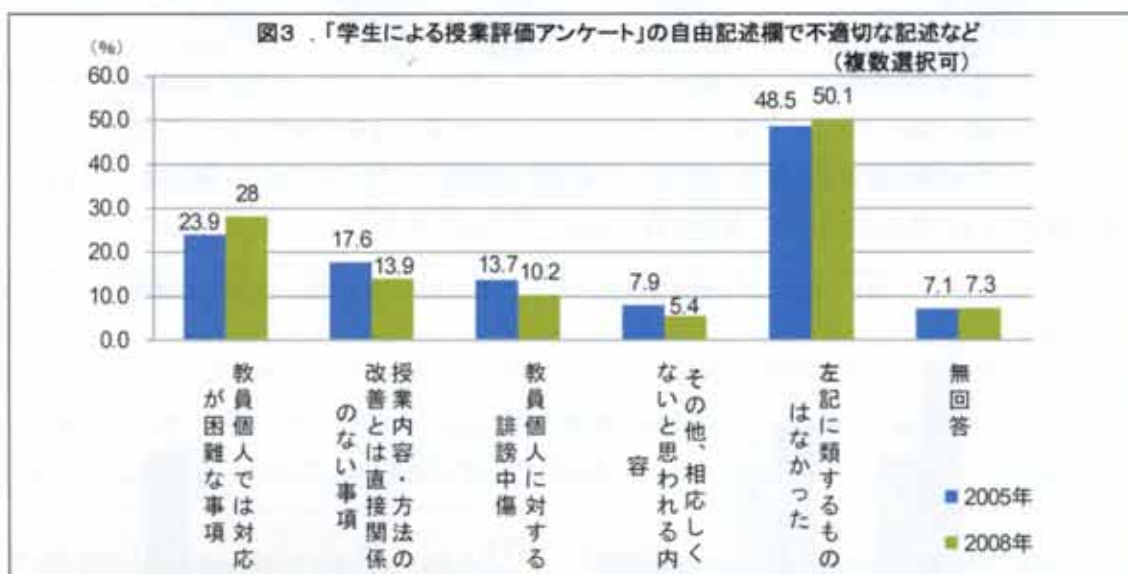
■ 「学生による授業評価アンケート」の自由記述欄の内容についてみると、「参考になる意見が多かった」が 2005 年の 20%から 2008 年の 36%、「参考になる意見も、ならない意見も同程度混在」が 2005 年の 43%から 2008 年の 49%と増え、2008 年の調査では両者合わせて 85%を占める。一方で、「参考にならない意見が多かった」は 2005 年の 16%から 2008 年の 9%へと減った。(図 2)。自由記述欄の有用性が高まっていることがわかる。なお、「参考になる意見が多かった」は、大学院(高度職業人養成)担当教員で 43%とさらに高い。



(3) 自由記述欄での不適切な記述など — 不適切な記述の有無は半々。

■ 自由記述欄で、授業評価として必ずしも相応しくない記述があったかどうかをみると、なかったが

2005年では49%、2008年では50%である。あった場合の内容は、「教員個人では対応が困難な事項」が2005年の24%から2008年の28%に増えた一方で、「授業内容・方法の改善とは直接関係のない事項」が2005年の18%から2008年の14%、「教員個人に対する誹謗中傷」が2005年の14%から2008年の10%と減っている(図3)。「教員個人に対する誹謗中傷」がたとえ4%でも減ったことは評価できるが、実数は68件である。学生とも協力し、皆無となるよう努力する必要がある。また、「教員個人では対応が困難な事項」が4%増加している。クラス編成や教室の物理的施設への目配りを要する。

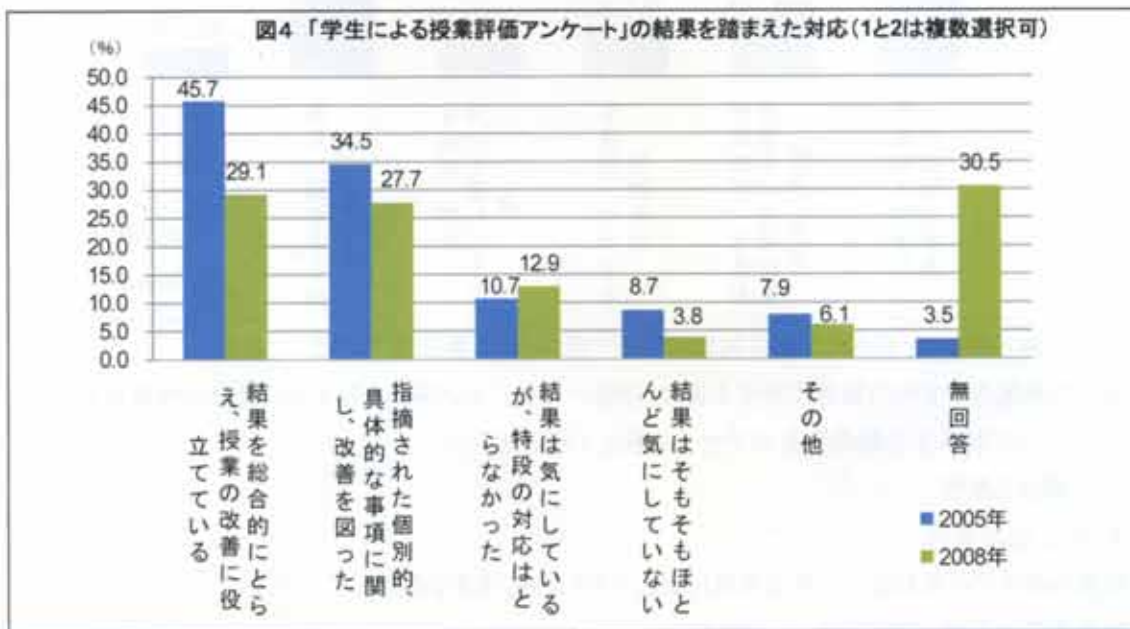


- ・「その他」の欄に記載された具体的なコメントで目につく意見は以下の通りである。
 - ・担当教員あるいは他の教員に対する暴言・中傷:「自分により評価を与えない教員は解雇せよ」。
 - ・アンケートに記入する際の学生のマナーの悪さ:「朝は苦手」。
 - ・TAに関する苦情。
 - ・クラス人数が多い。
 - ・教室のサイズがあわない—受講者数に対し小さすぎる、大きすぎる。
 - ・教室施設の不備:プロジェクターの性能。
 - ・授業時間への不満:1時間目の授業。
 - ・通学に時間がかかること:おそらく体育実技。
 - ・私語が多い。
 - ・以下、「同じ教材で同じように教えても評価が異なる」、「前年と比べ、内容を工夫したのに、評価は下がった」「あれこれ工夫しても、当たり前となり評価しなくなる」、「欠席、遅刻をする学生ほど低い評価をする」、「内容がやさしい前期は評価が良く、難しい後期は悪い」など。

3. 「学生による授業評価アンケート」の結果を踏まえた対応

(1) 結果を踏まえた個別教員の対応 — 授業改善に活用する割合は減っているが、改善が進んだためかあるいはFD疲れによるものか

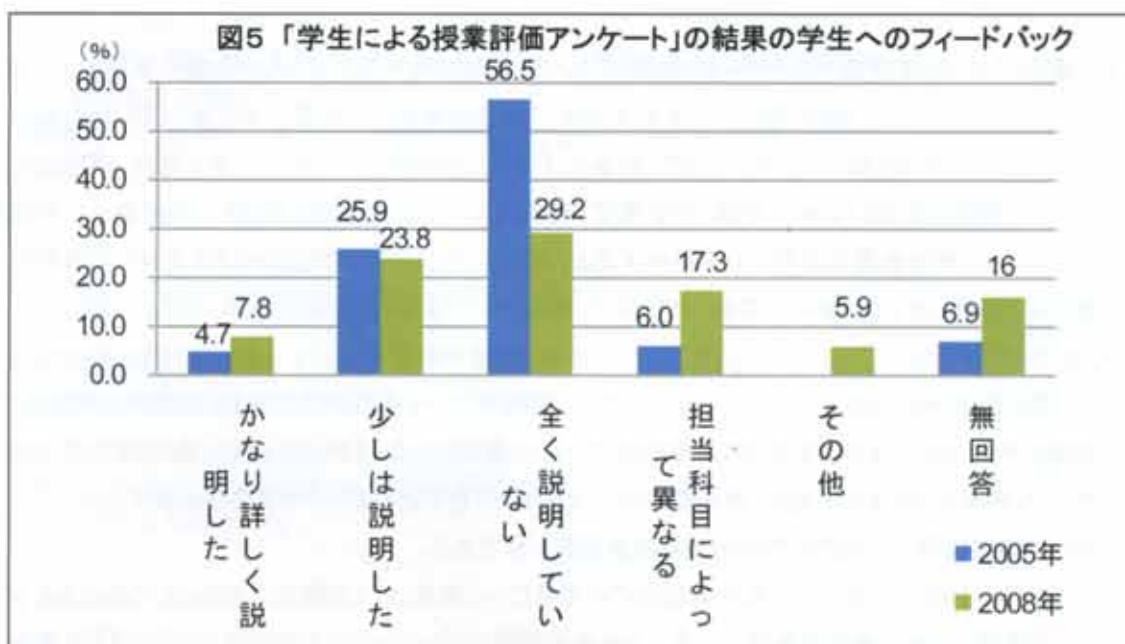
- 「学生による授業評価アンケート」の結果を踏まえた個別教員の対応状況についてみると、「結果を総合的にとらえ、授業の改善に役立てている」は2005年の46%から2008年の29%、「指摘された個別具体的な事項に関し、改善を図った」は2005年の35%から2008年の28%、ともに減った。、とはいえ、「授業の改善に役立てている」か「改善を図った」と回答した者は全体の47%を占めるので、半数近くの教員が改善に活かしていることになる。また、授業の工夫が進み(実際、授業の工夫を大に行っているという回答はこの5年間で14ポイント上昇した)、学部学生の満足度が4.0となり、授業改善の余地が少なくなった、あるいは、最初にアンケートを実施した当初ほど学生から厳しい指摘を受けなくなった、とも考えられる。
- 「特段の対応はとらなかった」、「結果はそもそもほとんど気にしていない」教員は2005年の11%と9%から2008年の13%と4%となり、「ほとんど気にしていない」教員は非常に少なくなった。(図4)。
- アンケートの結果を踏まえた対応に関して、一番大きな問題は、2005年と比べ、無回答の割合が大幅に増えたことである。たとえば、個別教員の対応では、2005年の4%から31%に増加している。



- 具体的に役立てた例および具体的な改善の例については、《参考資料1》にまとめて掲載した。

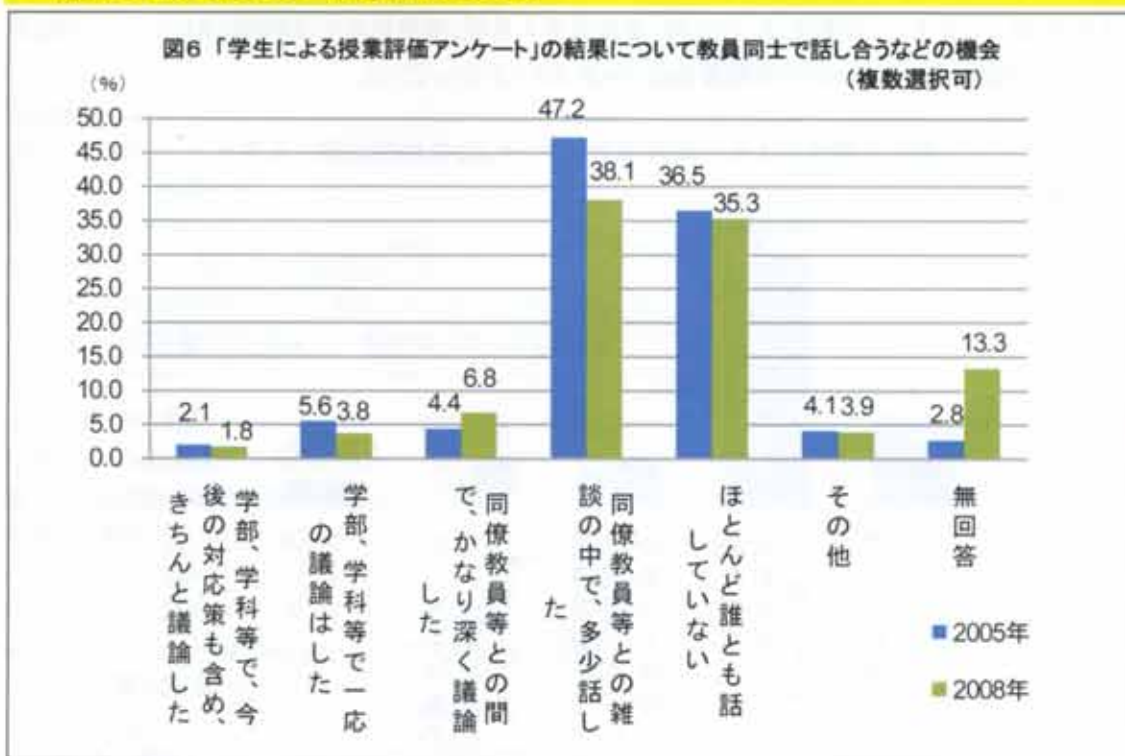
(2) 個別教員から学生へのフィードバック — 「全く説明していない」が3割弱。

- 教員が自分の担当科目の「授業評価アンケート」の結果を、どの程度、学生にフィードバックしたかをみると、2008年では、「全く説明していない」が29%と一番多いが、「かなり詳しく説明した」は8%、「少しは説明した」が24%となっている。「説明するときとしないときがある」は17%で、ともかく説明する教員が約半数を占める。(図5)。2005年において「全く説明していない」が6割近くに達していたのとくらべると、まだ不十分とはいえ(たとえば、無回答の16%と「全く説明していない」の29%を合わせると45%になる)、学生へのフィードバックは進んでいるといえよう。



- 「その他」の欄に記載された具体的なコメントで目につく意見は、「翌年の学生にフィードバックしても意味がない」、「前期の結果は後期に話し、次の年度の学生にはフィードバックしない」というコメントがあった。他には、「授業の進め方を大きく変えるとき、アンケート結果を参照することがある」など。

(3) 結果について教員同士で話し合う機会など — 「同僚教員等との雑談の中で多少話した」(38%)と、「ほとんど誰とも話していない」(35%)が大半。

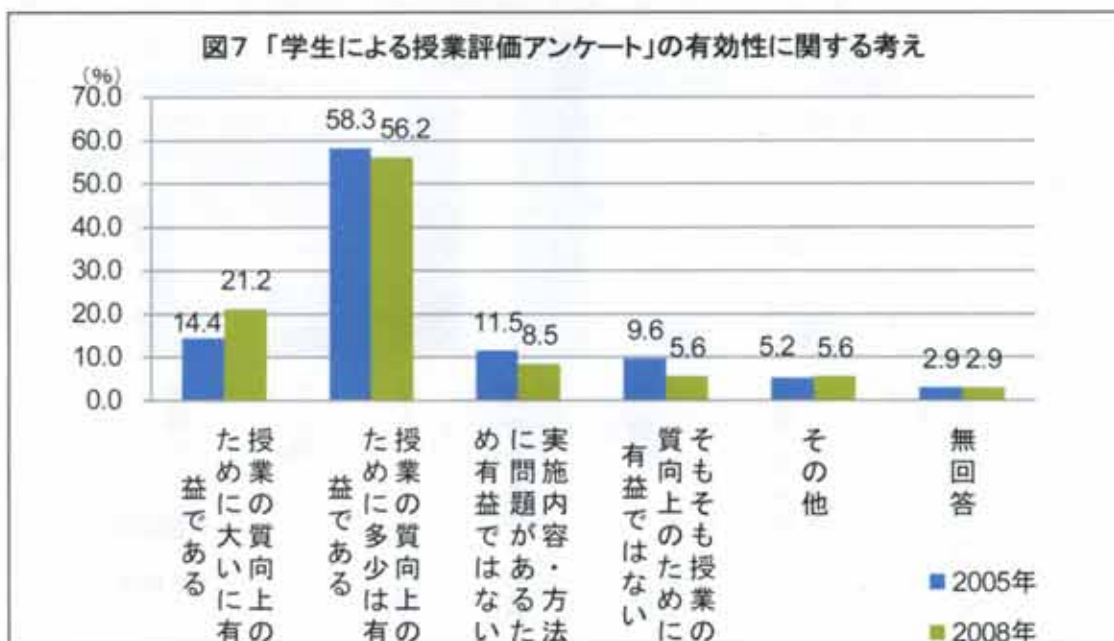


- 「学生による授業評価アンケート」の結果について、教員同士で話し合うなどの機会があったかどうかについてみると、2008年について全体では、「同僚教員等との雑談の中で多少話した」(38%)と、「ほとんど誰とも話していない」(35%)が多く、「学部、学科等で、今後の対策も含め、組織的にきちんと議論した」は1.8%、「学部、学科等で、組織的に一応の議論はした」は3.8%であった。(図6)。しかし、専任教員の回答だけを抽出すると、「学部、学科等で、今後の対策も含め、組織的にきちんと議論した」は6.8%、「学部、学科等で、組織的に一応の議論はした」は16.9%になる。
- 以上のことから、二つのことがいえる。一つ目は、今回の調査において、全回答のうち兼任教員の回答が82%を占めることを考えると、「学部、学科等で、今後の対策も含め、組織的にきちんと議論した」1.8%、「学部、学科等で、組織的に一応の議論はした」3.8%という低い数値は兼任の先生方の実態を示すものであり、兼任教員の方々をFDに巻き込むさらなる工夫が必要である。二つ目は、授業改善への組織的な取り組みはまだ不十分である。
- 「その他」の欄に記載された具体的なコメントで目につく意見は、「組織的に対応というのであるなら、非常勤にもその機会を保障すべき」、「多数の教員がアンケートに不信感をもっていて、本当の意味を理解していないと感じた」など。

4. 「学生による授業評価アンケート」に対する考え方

(1) 有効性に関する考え — 8割近くが有益との考え。

- 「学生による授業評価アンケート」の有効性に関する考えをみると、「授業の質向上のために多少は有益である」が56%で最も多く、「授業の質向上のために大いに有益である」(21%)と合わせると77%に達する(図7)。なお、この割合は、大学院(高度職業人養成)担当教員では88%に達しており、学部基礎73%、学部専門76%、大学院研修者養成72%を大きく上回っている。



- 以下、具体的なコメントをいくつか紹介する。

①有用性:

- ・授業の質向上には役立つと思うが、各教員の評価に結び付ければ尚良い。
- ・設備改善などの要求を知るうえで意味はある。そもそも、クラスサイズを改善する方が先決事項ではないか。

②助言:

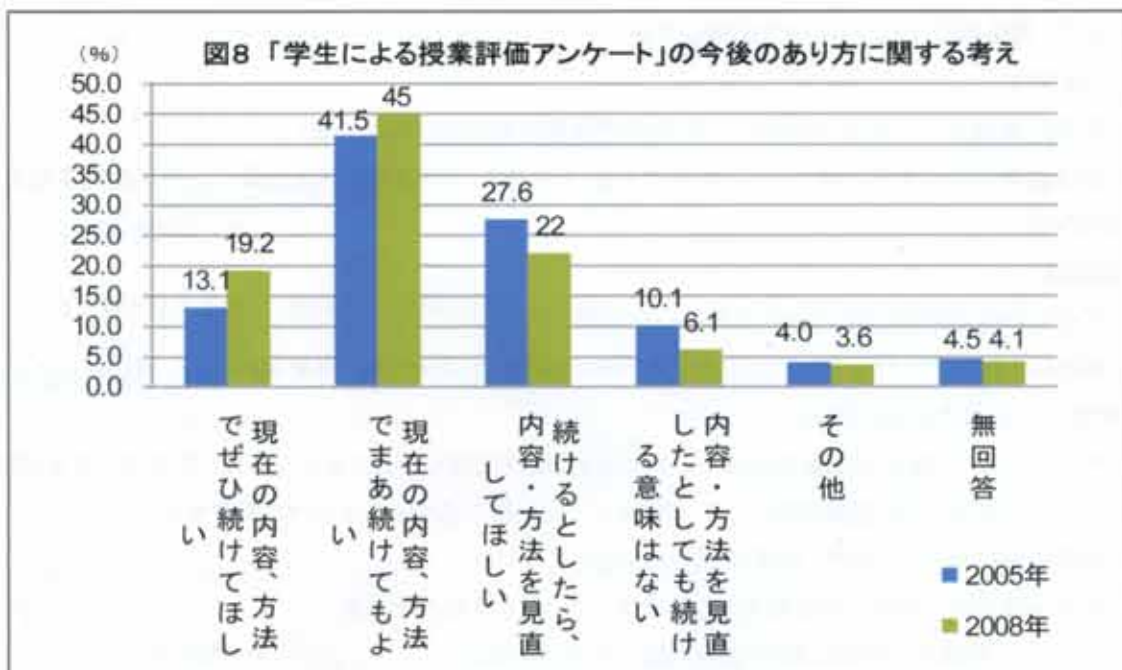
- ・すべての担当クラスで行う必要があるのか疑問。
- ・ほとんど出席していない学生の記述は無意味であるので、たとえば、出席 90%以上、成績B以上の学生のみ回答するようにする。
- ・無記名なので、無責任な記述が多い。それゆえ、教員に知らせる必要はないが、記名式にする。あるいは、記名かどうか選択可能にして、記名したものと無記名のものを分けて集計する。
- ・授業時間がつぶれるので、授業時間外に実施してほしい。
- ・教員が最初から学生に評価能力がないと思っている点は改善すべき。
- ・アンケート自体が、授業の質の向上へ結びつくわけではない。
- ・学生にアンケートの意義を理解させる必要がある。

③有用性に疑問:

- ・セクハラに相当する記述がある。それを入力して送付するのは、大学がセクハラに加担していることになる。
- ・普段のリアクションペーパーで対応可能。
- ・学生も同じ時期に大量のアンケートを書くため、飽き飽きしている。

(2) 今後のあり方に関する考え — 継続派が6割強いるものの、内容・方法の見直しを求める意見は2割強(専任教員の場合3割強)。

- 「学生による授業評価アンケート」の今後のあり方に関する考えをみると、「現在の内容、方法でまあ続けてもよい」が 45%で最も多く、「現在の内容、方法でぜひ続けてほしい」(19%)と合わせると 64%を占める。この割合は、大学院(高度職業人養成)担当教員では 75%である。しかし、一方で、「続けるとしたら、内容・方法を見直してほしい」という意見も全体で 22%ある。
- また、専任教員の回答だけを抽出すると、「現在の内容、方法でまあ続けてもよい」が 18%、「現在の内容、方法でぜひ続けてほしい」が 33%で、合わせると 51%になる。しかし、「続けるとしたら、内容・方法を見直してほしい」も 33%を占める。



- 見直してほしい内容・方法の具体案を整理し、《参考資料2》に掲載した。

5. FD 活動に関する経験、希望など

(1) 個人としてのFD活動への参加・経験、今後の参加・経験希望 — これまでの参加・経験としては、講演会・勉強会や授業参観が各2割弱。これからの参加・経験希望としては、それらが各3割強あるほか、教員相互、学生との意見交換、教材開発等に関するハード・ソフト面の支援が各25～30%と比較的高い参加意欲。特に兼任教員の方々への配慮が必要。

図9 FD活動でこれまでに参加・経験したことがあるもの(複数選択可)

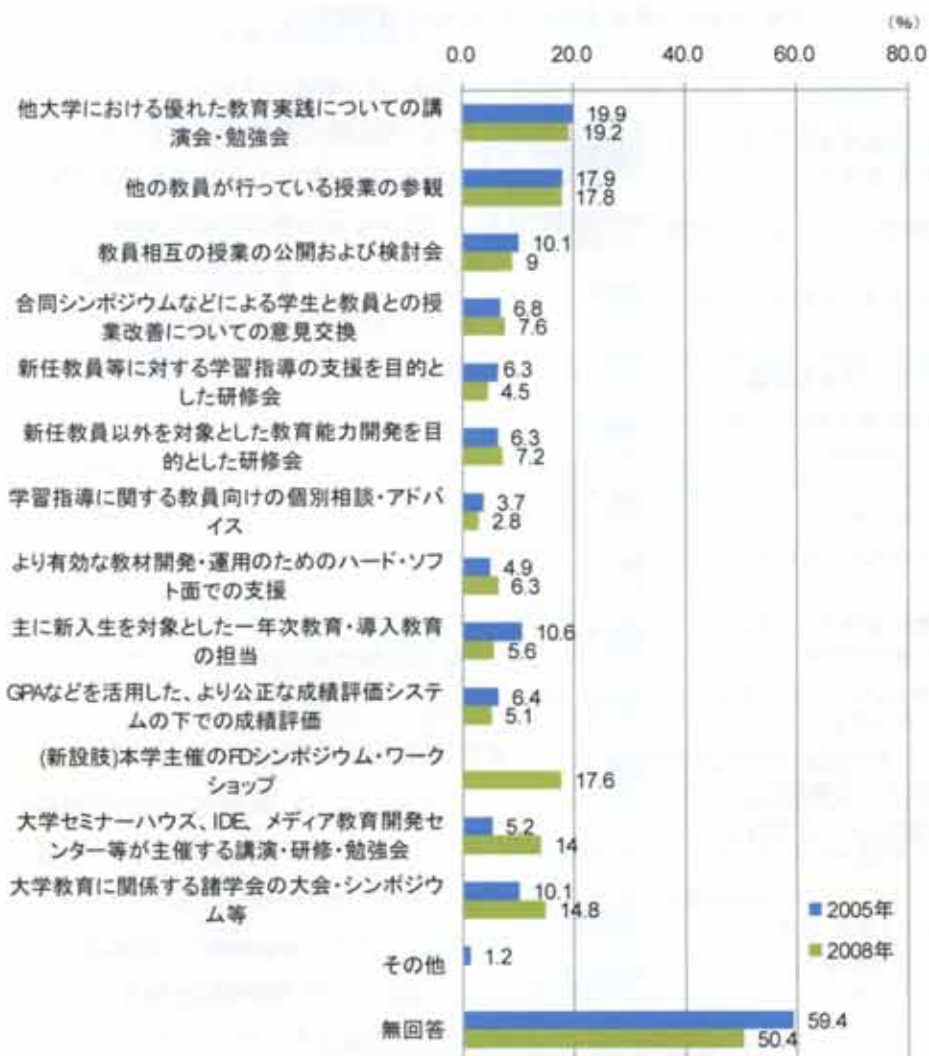
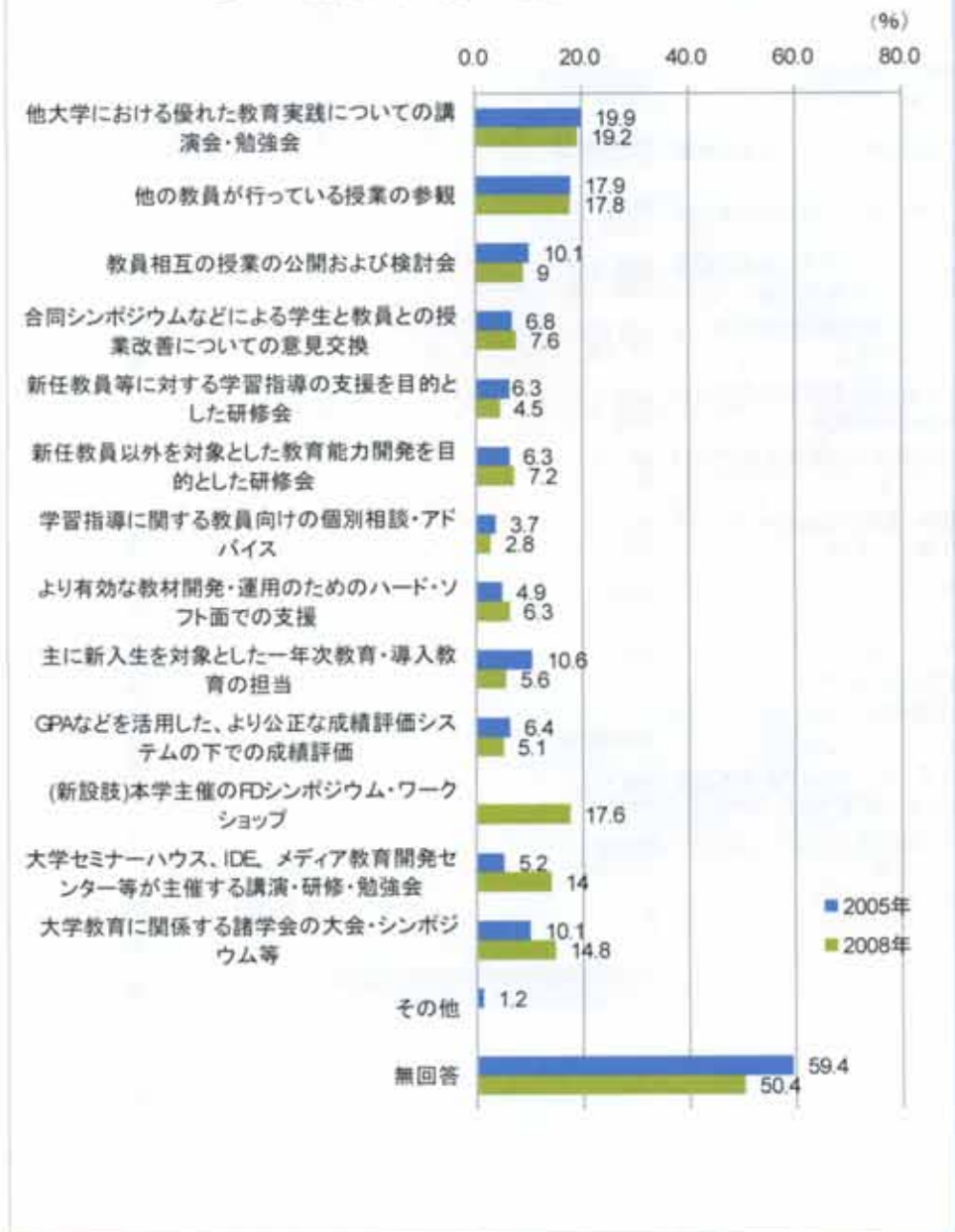


図10 FD活動でこれから参加・経験してみたいもの(複数選択可)



- FD活動でこれまでに参加・経験したことがあるものについてみると、「他大学における優れた教育実

践についての講演会・勉強会」が19%、「他の教員が行っている授業の参観」が18%などと、大学教育に関する各種講演、授業参観等が比較的多いが、約5割の教員は無回答で、取り立てていわゆるFD活動への参加経験はいまだないと思われる、2005年の調査では約6割が無回答であったことを考えると、FD活動への参加経験は増えているといえよう(図10)。

- 一方、これからの参加・経験希望としては、上記の大学教育に関する各種講演、授業参観に加え、教員相互や学生との意見交換が各2~3割の比較的高い参加・経験希望となっている。また、教材開発等のためのハード・ソフト面の支援をもとめる声も多い(図10)。
- しかし、実際の授業参観や授業支援システム説明会への参加者数を見ると、参加を希望していても、時間等の都合で実現できていないものと考えられる。
- また、「GPAを活用した成績評価」と「本学主催のFDシンポジウム・ワークショップ」への参加希望は5%前後であるが、専任教員の場合には10%前後となる。やはり、兼任教員への配慮が必要であろう。
- 「その他」の欄に記載された具体的なコメントで目につく意見は、以下の通りである。
 - ・VTR教材のリストアップとその内容紹介。
 - ・エチュードの使い方の講習会。
 - ・教員・職員・学生の間でのコミュニケーションの場づくり。
 - ・教授法・教育効果に関する文献の紹介。

(2)FD推進センターの活動、大学全体の施策などへの要望 — 全体としてニーズが高いのは、教室の物理的環境の整備、評価が高い授業のノウハウを知ること、およびほかの教員がどのような授業をしているのか、その悩みや工夫も含め知りたい。専任・兼任別では、教育補助のための人材(TAなど)への要望が兼任に比べ高い(図11は文書末尾に掲載)。

- FD推進センターの活動、大学全体の施策などへの要望についてみると、全体として見ても、専任教員だけを取り出してみても、「法政大学で、学生の評価が高い授業の内容・方法について知りたい」(40%と42%)が高く、「他大学などで行われている先進的な教育内容・方法について教えてほしい」(27%と35%)と「法政大学で、ほかの教員がどのような授業をしているのか、その悩みや工夫も含め知りたい」(30%と27%)も含め、授業のノウハウに対する関心が高い。
- 「教室の物理的環境の整備を一層進めてほしい」も、全体として見ても、専任教員だけを取り出してみても、高い(34%と42%)。このほかでは、ITを活用した新しい授業方法を活用できるようハード・ソフト両面の整備、受講人数の縮小など、教室環境の改善に対する要望が強い(図11)。
- 「その他」の欄に記載された具体的なコメントで目につく意見は、以下の通りである。
 - ① 複数の要望があったもの：
 - ・次回の教材の印刷。
 - ・TAに対する要望およびTAの質の向上。
 - ・クラス人数を減らしてほしい(150名以下、50名以内、30名以内、25名以内、など)。
 - ・学生に授業評価アンケートの書き方を指導してほしい。

- ・よい授業を行った教員が評価される仕組みをつくってほしい。
 - ・学籍簿をもっと早く手にしたい：ネット上で入手したい。
- ② その他の要望：
- ・大教室における出席管理の自動化。
 - ・学生に関する情報を教員が共有できる機会を設定してほしい。
 - ・(4月に、) LL 教室・情報演習室の使用講習会の開催。
 - ・教材研究費の支給：現在、授業用ビデオ等を自前で購入している。
 - ・第2外国語における到達目標を設定してほしい。
 - ・同一科目を担当する教員間における内容の差をなくす工夫：シラバスを第3者にチェックしてもらうのがよい。
 - ・学生へのフィードバックの仕方を教えてほしい。
 - ・教室の施設：旧校舎にワイヤレスマイクとCDを利用できる装置、教室にPCを持ち込まなくてもよくしてほしい、普段のメンテナンスをきちんとしてほしい等。

6. 本調査を踏まえた今後の対応

(1) 「学生による授業評価アンケート」について

有効性について問うた問 8 をみると、「授業の質向上のために大いに有益である」と「授業の質向上のために多少は有益である」の合計は 77.4% になっている。また、今後のあり方について問うた問 9 をみると、「現在の内容・方法でぜひ続けてほしい」と「現在の内容・方法でまあ続けてもよい」の合計は 64.2%、「続けるとしたら、内容・方法を見直してほしい」を含めると 86.2% になる。「学生による授業評価アンケート」の意義が認められていることを示している。とはいえ、現在のアンケートに問題がないわけではない。ちなみに、「続けるとしたら、内容・方法を見直してほしい」は 22% となっており、さらに、回答数が少ないとはいえ、専任教員だけを抽出すると、33.3% に昇る。これは無視できる数値ではない。要するに、大多数の教員はアンケートの意義を認めているが、現在の内容・方法は見直してほしいと考えている。

数値化すると見えにくくなるが、自由記述のコメントから判断すると、「学生による授業評価アンケート調査」に対する批判は以下の3点に集約できる。アンケートのあいまい性、信頼性、実施方法・利用方法の3点である。アンケートにあいまい性が生じる原因とその問題点は以下の通りである。①アンケートの役割があいまいになっている。②カリキュラム上の位置づけが異なる科目に対し、同じ基準を当てはめている。たとえば、講義、語学や実技などのスキル科目、専門演習に同じ基準を当てはめる。③その結果、授業・教員の多様性・個性が埋没してしまう。次に、アンケートの信頼性は無記名式であることと自由記述欄に大きくかかわる。自由記述欄にのみ意義があり、各質問項目の平均値には価値を見出さないとの意見がある一方、無記名アンケートは暴力であり、自由記述欄の暴言は人権侵害、との意見がある。最後に、アンケートの実施方法・利用方法であるが、様々な意見がある。詳しくは巻末の「参考資料2.3」に譲るが、どのような意図でアンケートを行うのか、どのようなフィードバックを行うのか、教員と学生との間、あるいは教員間に共通の理解がないことが批判の根本と考えられる。

以上の批判に応え、FD 推進センターは次のようなアンケートの見直しを提案する。

- (a) きめこまかな質問項目を備えた3種類の学部用アンケート用紙と1種類の大学院用アンケート用紙
- (b) 記名式アンケート
- (c) 「学生による授業改善アンケート」と名称変更

あいまい性に対しては、きめこまかな質問項目を設け、講義、語学や実技などのスキル科目、専門演習への対応性を高めた。また、学部向けに、学期初め用、普段用、期末用、3種類のアンケート用紙を用意し、授業改善により役に立つ工夫を加えた。自由記述欄についても、よかった点を記載する欄と改善すべき点を記入する欄を分け、学生の意図が明確にわかるよう工夫した。アンケートの信頼性に応えるためには、記名式を提案する。記名式を導入することにより、学生の責任ある回答が期待できる。誹謗・中傷の類もなくなるであろう。アンケートの実施方法・利用方法について、実施方法にかかわる問題は Web 化により解決できると考える。それゆえ、アンケートの回収率を確保する方がたてば、近い将来、Web 化を提案したい。Web 化により、学生の成績と連動させるなど、アンケート集計結果を授業改善に幅広く活用できる。利用方法については、今後の課題が多く残されている。というのも、各教学単位が組織的な授業改善を積極的に進めるうえで、十分に利用しているとはいえないからである。とりわけ、FD 活動をすすめるうえで、どのように兼任教員の方々の協力を得るのか、おおきな課題である。

なお、セメスターごとの実施を変更するつもりはないが、実施期間・時間帯等、アンケート実施上のこまかな問題点は改善する。

最後に、名称の変更について、上記2点の変更は授業改善を目指すもので、「学生による授業改善アンケート」という名称がより適切と考える。

(2)FD推進センターの活動について

FD推進センターの活動としては、本アンケート調査で出された希望、要望等を踏まえ、さまざまな具体的施策を推進していく予定である。たとえば、「法政大学 FD 推進センターの活動として、あるいは法政大学全体の FD(支援)施策として、あなたが特に期待すること」の結果を見ると、「法政大学で、学生の評価が高い授業の内容・方法について教えてほしい」が一番であるが、優れた授業を行っている教員の表彰制度を設置し、授業参観の機会を設け、他の教員の参考になればよいと考える。

最後にFDの主体は教員個人、そして組織としての各教学単位であることはいうまでもない。今後の各教学単位による組織的なFD活動に期待するとともに、FD推進センターはできる限りのお手伝いをする所存である。

以上

《参考資料1》

設問 5-1, 5-2, 5-5 の自由記述欄: 記述例の内容別紹介

■5-1「学生による授業評価アンケート」の結果を、総合的にとらえ、授業の改善に役立ててきた: どのように役立ててきたか具体的にお書き下さい

■5-2「学生による授業評価アンケート」で指摘された個別的、具体的な事項に関し、改善を図ってきた: どのような改善を図ってきたか具体的にお書き下さい

1. 技術面の工夫をする

- ・授業の構成・段取り・組み立て方を工夫する
- ・授業の時間配分を見直す・工夫する
 - ・授業ごとにテーマを決め、理解度を高める
 - ・目標に応じた授業展開を心がける
 - ・情報を取捨選択し、メリハリのある授業にする
 - ・前回の授業の難しいポイントを翌週の授業の冒頭で再度説明する

- ・ゆっくり、はっきりと話す
- ・繰り返し話す
- ・意識的に間をおいて話し、一回に話す量を多くしない
 - ・説明を短時間で簡潔に行なう
 - ・系統立てて話す
- ・マイクを使う
- ・わかりやすい言葉を使う
- ・丁寧な言葉使いをする
 - ・専門用語を詳しく説明する、減らす

- ・板書を丁寧に行なう
- ・ノートをとる時間を増やす・十分にとる
 - ・板書をプリントで補完する
 - ・文字の大きさ、濃さ、書く位置に注意する

- ・視覚的資料を増やす
 - ・視覚的資料を用いる際に、どの部分を扱っているか該当箇所を忘れずに指示する
- ・パワーポイントを使用する・工夫する・ダウンロードできるようにする
- ・パワーポイントをやめる
- ・OHPを見せる時間を長くする
- ・プロジェクターを利用する
- ・インターネットを利用する
 - ・課題の解答をウェブ上で公開する
- ・スライドデータを希望者にメールで配布する
- ・ビデオ教材を利用する
- ・CDの聞かせ方を工夫する
- ・エチュードを利用して情報発信し、学生の興味を高める
- ・配布資料をわかりやすくする
- ・配布資料を作成する・増やす・充実させる
- ・復習用資料と予習用資料を分けて作成する、配布資料に重要ターム欄を設ける
- ・配布資料は教室の2箇所に置いて配布する

- ・配布資料を事前に渡す
 - ・配布資料のサイズをそろえる
 - ・学生が書き込みやすい配布資料を作成する
 - ・両面印刷にする
 - ・印刷の質に注意する

- ・質問に対する受け答えの態度に注意する
- ・質問への学生の解答時間を増やす

- ・複数名で担当する授業の場合に、教員間の連携に注意する
- ・習熟度ごとに指導する
- ・テストの回数を調整する
 - ・小テストの採点方法を変更する
- ・私語を注意する
- ・机間巡回をする
- ・教室変更する
 - ・教室の前方に着席するように促す
- ・出席をとる
 - ・出欠をとる時間を決めて行なう
- ・シラバスの書き方を具体的にする
- ・参考文献・文献のコピー等、自主学習への導き方を工夫する
- ・多彩な外部講師・ゲストスピーカーを招く

2. フィードバックを重視する

- ・学生の希望・質問を毎回提出させ、翌週それに答えるプリントを配布する
- ・学生の意見を毎回書かせ、次回の授業で紹介する
- ・すべてのレポートにコメントをつけ返却する
- ・レポートなどのへのコメントは迅速におこない、翌週には返却する
- ・提出課題を毎回課す
- ・演習問題の講評に時間をかけ、間違いの傾向分析や正しい解を説明する
- ・学生との対話につとめる
- ・すべての学生に偏りがないようにフィードバックをする
- ・学生参加型授業を行なって理解度をみる(発言、発表、討議、グループワーク等)
- ・演習問題・小テストを課して、理解度をみる
- ・学生同士が互いに積極的に話せる環境を作る
- ・学生同士のディスカッション内容をレポートに残す
- ・リアクションペーパーを評価に入れる
- ・個別指導を取り入れる
 - ・個別指導が必要な学生に、意思表示をさせるようにする
- ・質問の時間をもうける

3. 学生への説明を重視する

- ・シラバスで評価基準を明確にし、初回授業でも説明する
- ・講義内容の理解を求めよう説明する
- ・授業の趣旨、授業で伝えたいことを明確に・丁寧に説明する
- ・なぜ必修で学ぶ必要があるのかを説明する
- ・学生の甘えと思われるものについては、厳しくコメントする

・聞いて・考えて・ノートをとることによる学習の重要性を、あらかじめ説明する

4. 学生の関心を高める

・わかりやすいように取り上げる例を工夫する(身近な例、時事的な事例、具体的な事例)

・教科書以外の内容もとりあげる

・具体性を高めると、論理性は薄くなり、内容が限定的になるという問題がある

・学生の興味・関心がある内容を取り込む

・説明を減らし、発見型の授業を心がける

・応用力・問題を解く力を重点的にきたえる

・自ら調査・研究する姿勢、自分で考え・まとめる力を重視する

・実社会との橋渡しを心がける

・学生の動機付けを工夫する

・学生が授業に期待しているものを知ること努める

・多様な学生の性格・ニーズを把握して、授業に反映する

・過去の学生の作品を紹介する

・授業準備の時間を増やす

・学科全体で課題の再考、教育方法、演習方法を変更する

・すべてのレベルの学生の理解を目指さない

・盛りだくさんで消化不良気味でも、内容面の充実を追求する

・前年度の復習も加えながら進める

・授業の予定を事前に告げ、できるだけ変更しないようにする

・勉強のしかたを教える

・性差を意識しながら授業運営をする、セクハラ発言にならないように留意する

・個人的な趣味や感想を語ることは控えるようにする

・出席を促すため、試験問題内容を工夫する

5. 学生の希望に合わせる

・進行スピードを遅くする

・スピードを速める

・難易度を下げる、調整する

・授業の内容を薄める、減らす、取捨選択する

・授業内容を絞りつつも必要なことはすべて教えると、スピードは速くなる

・スピードを遅くした結果、必要事項が終わらなくなる

・学生本位の授業にする

・学生に優しく対応する、甘くする

・進め方・教材を学生の希望を聞いて決める

・資料配布や、内容を簡単にすることは、学生を甘やかすことになる

・レポートを嫌がるのでやめる

・プレゼンテーションの評判がよかったので継続する

・学生が好まないのも、私語や居眠りを注意しないようにする

・予告したこと以外しないようにする

・課題の量を減らす

・配布資料の量を減らす

- ・テキストを変更する
- ・テキストの選び方を慎重にする

6. 改善の必要がないことを確認する

- ・やる気がでる
- ・自信をもって指導できる
- ・熱意を維持する
- ・よかった点をさらに伸ばす
- ・評価がよかったので、その水準を維持する
- ・不安があったが、好評だったので推進できる
- ・改善の必要がないことが確認できる

7. 翌年度に反映する

- ・教科書を決めるときに参考にする
- ・シラバスの改訂に役立てる
- ・課題への取り組み方などの学生の希望を、翌年度のシラバスに反映する
- ・今後の改善点としてリストアップする
- ・理解しているように見えても、そうでないことがわかる
- ・学期ごとの結果を比較し、全体の計画を見直す
- ・アンケート結果を学生に報告、説明し、理解を求める
- ・翌年度同科目担当者との連携を強化する

■5-5 その他

*(参考になる等のコメント以外のものを、以下に紹介)

- ・同じことをしていても、相反するコメントがあり、対応に困る
- ・相反するコメントがある場合、成績などのクロス集計や記名式が参考になるかもしれない
- ・ある点を改善すると、他の問題が生じる(進度を遅くする → 扱う内容が減る等)
- ・まとはずれな指摘が多く、対応できない
- ・授業の改善につながるような意見がなく、学生が授業評価アンケートの趣旨を理解していない
- ・逆アカハラのようで、傷つく
- ・毎回の授業で学生に感想を書かせ、翌週に反映しているので、授業評価アンケートをするまでもない
- ・毎回の授業で学生に感想を書かせ、翌週に反映し、授業評価アンケートで最終結果を確認している
- ・あえて難しい授業をする理由を学生に説明する
- ・学生評価アンケート結果を気にせず、教えるべきことは教えないといけない

《参考資料2》

設問9-3, 9-5の自由記述欄: 記述例の内容別紹介

■9-3 法政大学で実施している「学生による授業評価アンケート」の今後のあり方に関するあなたのお考えについておうかがいします。「続けるとしたら、内容・方法を見直してほしい」どのように見直してほしいか具体的にお書き下さい。

■9-5 法政大学で実施している「学生による授業評価アンケート」の今後のあり方に関するあなたのお考えについておうかがいします。

1. 回数

年1回

隔年: 2年に1回

基礎科目と専門科目とを対象に隔年で実施

1年生を対象とする年と3年生対象とする年

センターが行う共通アンケートと教員個人が行うアンケート

3年1回

5年1回

2. 対象

すべての科目ではなく、コア科目あるいは初年次教育科目とする

(担当教員が)希望するクラスのみ

出席80%以上、成績B以上を対象とすべき

3. 実施方法

授業外で行う:

自宅に持ち帰り、回答、提出

いつでも自由に回答できるよう、アンケート用紙をおいておき、随時回答

授業支援システムを利用する

授業内

終了間際ではなく、中間、あるいは開始後一番初に行う: アンケートに回答してもらうため

4. 実施時期・期間

3週間は長すぎる

期末ではなく、中間に実施する: 期末は乗ってくるので、勢いをそがれる

もっと早くして、集計も早く教員に伝えてほしい

5. 質問項目

学生が授業をどのように思っているのか知る目安にはなる。しかし、担当科目の質向上に関する具体的情報がほしい。

授業に応じた質問項目を設けてほしい

質問項目の設定があいまいで、学生側に問題があるのか、教員側に問題があるのか、つかめない
たとえば、

「内容は理解できましたか」について、理解できないと回答した場合、なぜ理解できなかったのか聞いてほしい。

学生側については、予習をしなかった、勉強しなかったからとか、教員側については、説明が早すぎるとか

担当教員は1枚のシートを見るわけではないので、相関が読めない

抽象的な、感想を聞くような質問項目はやめ、もっと具体的な項目にしてほしい

積極的に取り組みましたかー予習と復習はしましたか

「熱意」を聞く項目は必要ない

技術的な面も聞いてほしい

板書、声、教科書(適否、購入したか否か、価格の適否)

授業の「厳しさ」について聞く項目を設けてほしい: おそらく、「この授業はきびしかったですか」というような?

「先生に注意されましたか」を聞く項目を入れないと、特に1・2年生には意味がない

6. 自由記述欄

もっと授業の改善につながることを書くよう、工夫してほしい

記述欄のスペースを広げてほしい: 学生は十分に意見を書くスペースと時間もない

担当教員以外がチェックし、バウハラ等の問題を見つけるようにした方がよい

7. 形式

学生の記名式にしてほしい:

責任ある記載が望ましい

担当教員にはだれが書いたのかわからなくてよい

誹謗・中傷を書いた学生には、FD委員会等が注意してほしい

アンケート形式を止め、教員と学生とのフリートーキングにしてほしい

8. 集計方法

自由記述欄の誹謗・中傷を削除して、集計してほしい
出席50%以上の学生のデータを分けて出してほしい: 関心のある学生の意見をききたい
クロス集計をしてほしい: 成績とのクロス集計がほしい

9. その他

名称の変更

「学生による授業評価アンケート」→「学生による授業改善アンケート」

集計結果の活用

公開してほしい: 他と比較(数値評価、受講者数)しないと、自分のことを客観的にとらえにくい

組織的な活用をしていない

学生のアンケートに対する姿勢

学生にアンケートの意義を周知してほしい

アンケートの意味を事前にきちんと説明してほしい: アンケートに書いていいことと悪いことの区別ができていない

大学の姿勢

アンケートをするのであるなら、大学・学部がどのような水準、内容の授業をすればよいか、方針を示してほしい

複数教員担当の科目

リレー式の授業については、個々の教員ごとにアンケートしてほしい

教員側からのクラスに対する評価

学生は自分の授業態度等について甘い評価をしがちなので、教員が中立の委員会にクラスに対する評価を出したい場合もある

《参考資料3》

設問12の自由記述欄：記述例の内容紹介

■12 その他、法政大学のFDについて、ご意見・ご要望などございましたら、自由にお書き下さい

1. FDについて

- ・何を目標しているのか、教えてほしい。
- ・効果を教えてほしい。
- ・各学部でFD委員会をつくるべきで、その活動に予算をつける。
- ・授業の「質」とはなにか、法政大学なりの基準を明確にしてほしい。

2. アンケートについて

- ・大学全体として活かされていない。
- ・表彰制度(ベストティーチャー賞)の創設:アンケート結果を給与等に反映させないと、やる気にならない(複数回答)。
- ・結果をオープンにして、他の教員の結果がわかるようにすれば、自助努力が加速される。
- ・アンケートの質問項目とカリキュラムに連動性をもたせる:たとえば、質問項目は「演習」にはそぐわない。
- ・自由記述欄はハラスメント(複数回答)。
- ・自由記述欄によくない回答の例をあげる:たとえば、「教員を変えた方がよい」など(複数回答)。
- ・自由記述欄を別紙にして、教員がじかに受け取れるようにする。入力の手間が省ける。
- ・学部と大学院とは分けて、別な形にする。
- ・学生との直接対話にする。
- ・学生の反応がないとがっかりする。
- ・学生が「自分で考える」部分をどこまでお膳立てしなければならないのか、大学のポリシーを明確にしてほしい(複数回答)。
- ・学生にとって「おもしろい」「やさしい」だけが、授業の価値すべてではない。
- ・講義とはどのようなものであるかについて、教員と学生との間に差がある。評価が悪いと一方的に教員のせいにされるが、いかがなものか。
- ・専任に寛容で、兼任に厳しい、というものにしないでほしい。
- ・複数教員が担当する授業について、担当教員ごとに集計結果を返してほしい(複数回答)。
- ・将来を見越したアンケートにするため、OB・OGにも実施してほしい。

3. 学生に対する要望・不満

- ・遅刻が多く、15分後でないと学生がそろわない:1時限。
- ・初年次教育をしっかりとってほしい:学生はノートをとらない、ノートのとり方を知らない。
- ・教室で飲食はしない。
- ・明るく、よく話すが、人の話を聞かない学生が増えた。

- ・基礎学力不足。
- ・無気力:単位をとるため、ただ出席さえすればよいと思っている。
- ・授業崩壊
- ・個々の学生にマンツーマンで4年間の学習計画を指導する学生補佐体制をつくる。
- ・学生の実態をもっと知りたい。

4. 教員・授業について

- ・評価の甘すぎる、あるいは辛すぎる教員はチェックすべき。
- ・教員は危機意識がない。
- ・専任と兼任との格差、給与の差の根拠を教えてほしい。
- ・明確な教育目標を設定してほしい。
- ・演習の実態調査をしてほしい:担当学生数、時間、設備等。
- ・GPAを活かして受講させる:科目によって、成績が一定以上の学生しか受講できないようにする。

5. 授業環境・設備について

- ・受講名簿の配布が遅い。他の大学では、第1回授業の際、仮名簿ができている(複数回答)。
- ・TA等、支援体制を充実してほしい。
- ・兼任用ロッカーの設置:現在は薄いケースのみ。
- ・教授室のそり返った長机、古めかしいソファは変える。

6. 当アンケート調査について

- ・問5の1「総合的にとらえて」の意味が不明。